第５図　壺形土器の変遷

式土器（妙見式土器を含む）の１Stageを設定することができる。さらに平栫式土器と栫ノ原式土器（塞ノ神Ａａ式土器）の間に石坂上式土器[1]の１Stageを設定することができる。今後の資料の増加に伴って，さらに細分が進むことが考えられるが，南九州の壺形土器の伴出型式は今のところ５段階を想定している（第５図）。

まず，押型文土器期は，これまで瀬田裏遺跡で出土している。瀬田裏遺跡例は，器形はまさに壺形土器に該当しており，押型文土器期には既に壺形の器形は存在していたことを窺い知ることができる。しかし，瀬田裏遺跡例では胴部に意図的に穿孔が施され，特殊に製作された土器の感も否めない。そのため，ここでは南九州の壺形土器からは除外して考えたい。なお，天道ケ尾遺跡例で，報告者は手向山式土器期の壺形土器に比定しているが，山形押型文の形態から押型文土器期に属することも考えられる。さらに，細片のため胴部の形態は不明であるが，くびれ部の頸部の復元内径は約15cmと壺形土器と認定するには口縁部が広いタイプである。

手向山式土器期の壺形土器は最初に認識されたものであり，出土例も最も多い。特に，城・馬場遺跡例は，口縁部は若干欠くもののほぼ全形を知り得る好資料といえる。器形は，口縁部を中心に数タイプに分かれる。まず，肩部に繋ぎの稜をつくり頸部は内傾して細まるが，頸部径は比較的広いものである。口縁端部は，僅かに外反する。同様な器形を呈するが，口縁端部は外反せず，頸部の細まった部分を僅かに直上したまま納めるものもある。頸部は筒状に細く立ち上がり，胴部は卵形の器形を呈するものがある（城馬場タイプ）。口径は５cm～６cm程度の細い筒形で，口縁部は僅かに外反気味のものである。筒状に細まった形でそのままおさめるものもある。

このようにStage１の手向山式土器期は，壺形土器の口縁部器形の形態の種類は多彩である。この現象は，手向山式土器自身の文様の組み合わせ等が多彩であることや遺跡発見数が多いことも考慮しなければならない。手向山式土器期の場合，壺形土器は，細口で直行した筒状の口縁部のタイプ（Ａ）と広口の口縁部のタイプ（Ｂ）に分けられる。Ａの場合，口縁部には突帯文や凹線文など手向山式土器特有の文様を口縁部に使用し，胴部とは文様で分離している。Ｂは，これまでの出土例では，網目撚糸文や山形押型文などで口縁部から胴部まで同一の文様を施文している。なお，内傾した無頸壺様の口縁部形態がみられるが，この形態がＢとして定着することも考えられる。

天道ヶ尾式土器の壺形土器は，口縁部に三角形の刻目突帯文を数条巡らすタイプがある。刻目突帯文を巡らすものには，口縁部が筒状に直行して口径が広いものと狭いものがあり，口縁部は若干外反する。頸部文様帯から胴部文様帯の波頂部直下に瘤状突起と縦位方向の突帯の貼付がみられるが，これは大きな特徴としてあげられる。地文には縄文及び撚糸文がそれぞれ施文されており，刻目突帯文を巡らせるタイプは手向山式土器特有の地文が使用されている。特に，地文の撚糸文の上から凹線文で鋸歯状文を描いているが，後続する平栫式土器との関係で興味深い。

このようにStage２の天道ヶ尾式土器の壺形土器は，口縁部が外反する器形と頸部から口縁部が直行する長頸壺の器形を呈するものがあり，施文上では特に，瘤状の突起が数多く貼付されるのが大きな特徴といえる。

平栫式土器期の壺形土器は，以前は前畑遺跡だけの出土であったが，その後上野原遺跡など多くの遺跡で発見され